

The background features several thin, intersecting lines in various colors: green, cyan, and pink. These lines create a complex, abstract geometric pattern of overlapping shapes and angles across the white page. The lines are thin and light in color, creating a subtle, artistic backdrop for the text.

# 心の詩

ある日、突然「別れよう」彼女に言われた。

僕は「なんで？」と答えた。

「さよなら」

そして、僕は一人になった。

僕は彼女の事が好きだ。そして目の前にいない。そして小さな決断をした。「詩を書こう」いつか出会える事を信じて。近くの駅に座って看板を立て100円で詩を書きます。そしたら、一人のおばさんが来た。「私、前に、詩を書いていたの」「え？そうなんですか、僕は今日から書き始めました」「詩はね、未来を映し出すものなのよ、私に書いてちょうだい」「わかりました」僕は、なんだか直感で、「次」というイメージが現れた。そして書いたく 近くにいる 探してみる 一つの事 どこにいる 遠くまで 約束する > おばさんは、「私の子供を紹介したい」と言い出した。僕は迷った、だから、一度お願いしますと言った。「じゃあ、今日は終わりね、うちでご飯食べよう」「はい」僕はおばさんの指示にしたがった。家に着いた、とても大きな家だった。「私の子供よ」「初めまして」「あっ、初めまして」僕は思った、可愛い。「この子ね、詩を書き始めた所なのよ」「そうなの？」「はい、今日から書き始めました」「今日から？何やってんのお母さん、せっかく書き始めたのに、邪魔をして」「だって、あなた、彼氏欲しいって言ってたじゃない」「だからって、こんな事しなくても、自分で探すわよ」「そう、悪い子ではないと思ってね。はい、彼の詩、あんたも昔、詩書いていたわよね、それ私に見せなさい」「明日渡すから、きちんとまとめとくわ」「お茶は飲む？」「コンビニで買ってくるわ」「あそ、カラオケでも行ってくれば？」「初めての人とカラオケなんか行かないわ」「じゃ、行ってらっしゃい、気をつけて」「あの、お茶代僕が払います」「いいのよ」「お母さんが1000円くれたんです、だから、お詫びに」「あんた、弱気ね、近々、彼女と別れたんじゃない、チラッと、詩、見たけど彼女のこと思ってる」「僕は彼女の事が好きなんです」「なんで、別れたの？」「わからない」「それが原因ね、あんたが弱気だからじゃない？」「僕は好きっていう気持ちだけで生きて来ました」「自分の為の人生よ、自分が楽しいって思うかどうか、家族大切にしてる？」「もちろんです」「なんでだろう、きっと彼女に好きな人ができたとか？」「それ以上言わないで」「きっと違うよ」「え！」「さて、公園でも行こっか、私の部屋入りたい？」「そうだな、入れてもらえるなら行きたい」「じゃあ、テストするわね、あなたの名前は？」「深川祭事」「ふむふむ、祭事くん、祭り事は好きなの」「嫌いです」「真面目すぎなんだな」「きっとそれが原因、祭り事やる？」「今の所考えていない」「そっか、じゃあ私の部屋に入りたかったら、イベント打ってからね」「え、僕がイベントやるの？」「だって名前に祭事って

書いてあるじゃない、きっと親も祭り好きな親ね」「親か、祭り事好きなんだよね」「きっと彼女もそれを望んでた、言わなかった？」「一度も」「君を信じたんだね、写真ある？」僕は写真を財布から出した。「気持ち悪いわね、別れた彼女の写真持っているなんて、今、捨てなさい」「いいよ、捨ててやるよ、ここじゃ捨てられないから、川に行こう」「川か、私、あなたと出会ったばかりだから、自分で捨てれば？大切なんでしょ、まだ、好きなんでしょ？」「僕さ、結婚考えていたから、別れるって思えなくて」「本心が出て来たわね」「毎日、楽しくて、お互い、本を読むのが趣味だったから本を貸しあって、旅行が好きだから飛行機研究したり、お互いの手と手繋いで散歩も好きだった」「なんでだろうね、そんなに好きなのに、きっと、海外にでも旅行に行ったんじゃない？海外ボランティアとかって事は、あなたの事が好きなのね、半年後かな、絶対連絡くるわ、その前に仕事しないとね」「海外ボランティアか考えもつかなかった」「女なんて大体わがままの時は別れるわ、その間に就職しといてねって事、愛をとる？仲間をとる？このまま詩を書く？やけくそじゃ彼女と結婚できないよ。じゃあ、「詩は趣味かな。」「私を信じる？違うかもしれないけど、あなたの口から吐く言葉を読むと、絶対その子よ、あなたは音楽を趣味にするべきだ。「嫌だ、俺音楽嫌いだもん」「嘘だ、逃げてるだけだ、真面目に本読んで、わかったふりして、みんな好きなんだよ音楽、最終的には死ぬ時もお経読む、だから、生まれてきた時も昔はきっと歌を歌ってた。最初に耳にする言葉くらい考えておけよ。言葉も文字も全部ARTだ。その人が文字を決めた時、きっと盛大に宴を行なった。そういった決まった事、その時は宴なんだ楽しい事＝ショウなんだ。わかった？イベントも悪くないでしょ、名前通り、まずはそこが入り口、そこから人生の道に乗る、あなたはもう少しで道に乗るわ、彼女は本当に私でいいの？って言っている事実もある。あなたはどうですか？」「僕は彼女なしでは生きれない、彼女と共に生涯を送りたい」「そういうのなんていうか知ってる？」「知らない」「バカップルっていうの」

あなたを見ていたら腹が立ってきた。そして言ってしまった「あなたと付き合いたい」「えっ、なに言ってんですか?」「あなた幸せものだから、その彼女より私の方が上だわ、きっとイベントやりなさいとか言わない彼女だから、まだ、完成していない。しかも、結構つまらない人生で、あんたがいないとほぼ何にもしない彼女だよ。あんたが彼女好きだから、あんたが引っ張っていく。なかなかそう言った男は3人しかいない。って事はあんたもそれに合格してるなら、あんたと付き合った方が楽しいじゃない、どう?」「お断りします」風が吹いた。公園から見える景色は彼女が笑ったような気がした。「そっか、残念、私も幸せになりたいな、付き合うのは断られたけど、合コンしない?あなたに私のグループ引っ張って行ってよ。そうすれば、ダサい男たちとつまらない遊びに巻き込まれないじゃない。」「うん、いいよ。でも僕友達あんまりいないんだ、彼女とずっと遊んで仕事してたから。会社でも真面目キャラだから飲む時も一人だし。」「私もそんなもんよ、だた女の子として、一人じゃ生きて行けないから、二人連絡して仲良くしてる。信じれるのは家族だけど、友達ももちろん大切よ。男の人は家庭守らないといけなから、全部仕事だからプライベートくらいちょっと優しいくらいが丁度いいと思う。」「そうだな、仲のよかった友達に連絡入れてみるよ、合コンやろうよ。」「わがまま言っている?柊充って知ってる?」「柊充?知ってる」「私、その人と飲んでみたい。」「わかった、その人ね。連絡してみる。」「3人がいい、もう一人はその人の仲良しがいい」「そうだな、聞いてみるよ」「最後に<詩>書いてよ、2枚目ね」「僕の路上最後の詩だ、これからは<詩>は心で描く事にする。大事な時に一個一個心とノートに書き留めておく、じゃあ、行くよ。」僕は未来のすべてを読み取られている天才だと思った本当にいっぱいいる < いいよ知っている事 受け止めている時 提示する君へ 大きな印 止まる時間 限りある果てしない今 > 僕はサインはしなかった。「はい、ありがとう、君のおかげで未来がわかった。」隠されたヒントはそこらじゅうにあるのかな?と思った。「なにこれ、すごい。」「えっ、なんかわかる?」「提示する君へ、ここちょっとおかしいわね」「堤」「きっと今年は不作よ」って事は野菜が高くなる。今年はみんな怒っている年だわね」「来年は?」「来年いいわ、あんた今年、死ぬわ、死ぬかわからないけど、危ない、自分でわかっている?」「わかっています。実は僕も未来わかるんだ。今年乗り切れるかな」「わかっているなら、自分でなんとかしなさい」「はい、頑張ります、合コンいつ?」「連絡するから、番号教えて」「彼女にびっくりさせる為に仕事頑張ろ!はい、番号」「あんた、心の中で詩を書くって言っていたけど、知り合ったら、詩を書きなさい。その方がいいわ」「わかりました、では100円頂きます。」「ちっ、こんだけ教えたのに金とるの?むしろあんたが金払いなさい」「わかりました、100円払います。」「このお金神社でお祈りしとくから安心しなさい、じゃ、飲み会で。」「お母さんによろしく。」「明日、作品見せなきゃ。」「頑張るって。」

そして、僕は彼女が言った事を胸に秘めて進む事にした。ボランティアかそれには気づかなかった、きっと友達と二人で行ったんだな、嫌、違う、長期なら一人で、なんの為に、その文化を知りたい、何にも言ってなかったもんな。その時、驚かして、連絡がきたら指輪を持ってプロポ

ーズしよう。それと、イベントかぁ。あんまりやりたくないな。でも両親がこの名前つけて立派にやってくれっていうなら、一度やってみるかな。それと今まで以上に仕事頑張ろ。真面目キャラも少し変えて、話してみよう。この3つを頑張ろう。とりあえず半年目指して進もう。そして路上で詩を書く事を辞めてしまった事をそして勢いでやってしまった事を後悔した、それでも女性が言っていた、知り合った人に詩を書く事それで続いていけるからこれからも継続できる。僕の詩はこれからも続いていける喜びへと変わった。そして今日は早くに寝る事にした。そして、彼女の写真をみた。きっと何かの縁、繋がりが僕らを引き寄せたんだな。きっと幸せにしてみる。そうしたら、いつの間にか寝ていた。そして夢をみた。両親の夢だ。イベントを打ちなさい、僕たちの夢なんだ。そしてバット目が覚めた。イベントか。5時だった。そしてイベント名を考えた。そして彼女が帰ってくる前にイベントをやろうと決めた。そしてPCDJにした。PCはあるからそれでいいと思った。そして時間の許す限り練習した。そしたら、仕事も友人関係も円滑になった。そしてイベント「斬新」を打った。ほぼ会社の同僚メンバーで、この話をしていたので、俺たちでやったら面白いんじゃない？って言っていたので、会社のメンバーがほとんどだ。始めは人の入りは期待していない。それでも10人ほど集まってくれた。会社のメンバーと踊り狂い、最高の日だった。こんな楽しい事があるなんて思わなかった。きっと両親も喜んでくれているんだろうと思う。そして、同僚DJとこれからもイベントを続けていこうと思っている。そして、1回目のイベントが終わったその足で結婚指輪を買った。彼女から連絡が来て会った時に渡す為に連絡はくると言っていたが、まだ、連絡は来ていない。もう半年が過ぎているというのに、、、

もう半年が経ち彼女から連絡はなかった。あれ？連絡はくるって言っていたのにな。そして、僕からも連絡するのは辞めておく事にした。そして彼女の写真を捨てる事にした。近くだと思いが残ってしまうので、休みに北海道に行って燃やそうと決めた。そして北海道で燃やす時に詩と一緒に燃やす事にした。 < いつも君 届くかな夢 忘れないで 忘れないで 忘れないで 愛してる > そして、つるが気になったので、つるだけみて帰った。そして合コンの約束の日になった。柊充さんとも連絡が取れて友人も連れてくるという事で、女性にも連絡して準備は大丈夫だ。そして夜、みんなが集まった。「貴重だから、この時に乾杯」柊さんが言った。そして女性が言った「幸せに乾杯」会話も弾み、楽しい時間が過ぎる。「君は糸君とどういった関係かね。」「路上で詩を書いていたんです、その時に、糸さんのお母さんに会って、うちの娘を紹介したいのって言われて、公園でお話したんです。」「僕、糸君、気に入った。君に感謝する。」「実は、柊さんの事、好きみたいなんですよ。」「ほんとかね」「会ってみたいって言ってたんです。」「そうか、じゃあ、ちょっと席を外すね。」「そして、柊さんと糸さんは外へ行った。』そして二人はそのまま帰って来なかった。そして3ヶ月後、二人は結ばれた。そして、その時、会ったお友達、咲ちゃんと気が合った。「糸さんとはどういったご関係何ですか？」「会社の同僚よ」「どういった、お仕事何ですか？」「アーティストよ」「実は趣味で詩を書いていまして、実はあった人になるべく書くようにしてるんです、それで、今日も書いて来ました。』 < 止まれば見える 行く先に 星光り さざ波に 山照らす太陽 泳ぐ雲 > 「話聞いたけど、彼女とはどうなったの？」「連絡こなかったんです」「自分からは、いえしてません」「そっか、残念ね」「もう、彼女の事は忘れました、悔いはありません」「ほんとに？」「はい、連絡がくれば準備していたんですが、連絡がないのでもういいです」「そうね、そういう事も必要かね」「今、仕事は、NAZAにいます」「そうなんだ、無重力ってどんな感じなの」「わたあめみたいな感じですよ」「それは、感想になってないわ」「そうですか、引っ張られる感じですかね、人でも物でもなんでも」「アヒルみたいね」「大人と子供みんな仲良し、醜さもありませんね」「色が違うだけね」「あんまり関係ないと思いますけど」「違ったりするのって、違うからじゃない」「いえ、違うから、黒いんです、黒の上には個体です」「その見方だけでしょ」「他にしかないものですから、そのように生きていますしね」「順序を通っていますしね」「自然と共存だと思えますけど、どこの全てにおいて」「人間も？」「近い存在だけど、やっぱり自然から産まれてきているんですね」「自然体では生きられないわ」「ある程度の決まりと固まるとルールが身になってそれぞれになって」「常に考えるのは普通でしょ」「考えるのは机の上だけです」「考えすぎているんじゃない？」「考えるが仕事ですから」「答えになっていないわ」「何があるかわからないそれが面白いんです」「夢の中で生きてるんじゃない」「夢の中ですから」「美味しいワインが飲みたいわね」「注文しましょうか」「お願いするわ」僕達は美味しい料理と美味しいワインを嗜み時が流れた。そしてその夜、流れ星を見た。願いは家族が幸せであるようにと願った。家に帰ってくると電気がついていて、そしてPCもそこには僕の仕事のデータが消えていた。誰かに入られた。それしか考えられない。でも物は全部ある。誰がこんな事を

。電気も消したはずだ。そして上司に連絡した。「すみません、今取り組んでいる仕事のデータが消えました。「そうか、じゃあ0からやり直した。今からデータ作ってくれ」「同僚と共に今から取り組みます」「頼んだぞ」僕は会社に向かった。会社に着くと同僚がいた。「データどうだ？」「俺のもやられてる」「誰だこんな事したやつは」「仕方ないっすね、また作りますか」その日は、思い出せる限界までデータを起こした。気づいたら、朝の7時だった。そして同僚に朝食を食べに行こうと誘われたので、行くことにした。「最近さ、いい事ないんだよね」「君にとっていい事ってなんなの？」「それがわかんないんだよ」「俺たちDJサークルやっているから、よかったら入る？」「そうだな、入ろうかな」「今では、お客さんも沢山入る大きなイベントになってきたんだ」「そうなのか、PC買って回してみようかな」「ラウンジからのスタートだから、Mix撮ってきて」「俺の個室にタップあるから、今から教えるよ」「今？」「そう、できるまで頑張るだけだ」そして、PCを付けた瞬間、PCが爆発した。「やっぱりだ、最近いい事ない、何かが間違っているんだ、それがわからないと、この先も危ない事で満ち溢れる、実はDJはいいけど、その答えが知りたくて。

僕は爆発を認める事にした。認めたという事はきっと糸の言った通りに事を進まなかったからだ、そして半ば諦めかけていた結婚をしないという現実にも怒ったんだろう。そして僕は考えた。1回糸に会おう。そしてすぐに電話した。そして繋がらなかった。そして自分で思った。心の詩を作ろうと思い椅子に座った。 < 君に会いたい わかってても わかんなくても 僕を壊すのは君だ なぜ会えないんだ > この詩を5回繰り返した。そしたら連絡があった。「何?」「お茶でもしないかと思って」「いつ?」「いつでもいいよ」「じゃあ、今週の日曜日、場所はハチ公前で11時、どう?」「お願いします」そしてPCを買いに出かけた。その前に家が心配だったので、家に寄った、そしたら電気がついていて、そこには紙に詩が書いてあった < 事実の幸福 架空の思い 辿る道筋 今の経路 蘇る視界 > 誰か部屋に入ったな、大事にしていた、写真もない。だから仕事を休んで一人で写真を撮った場所へと向かう事にした、仕事どころではないと判断をしたので。そして、僕が大切にしていた、写真の場所に手紙が落ちていた。僕は見ていいものか悪いのか迷った。でも、これを読まないとなんだか悪い気がしたので、思い切って読んでみた。そこには詩が書いてあった。 < 聳え立つ木 風貌は泳いで 足早に光を覗む 適度な景色 講談の語り 旅に漂って > 素晴らしい、詩を書く人だなって思った。この詩は海を想像するので、水着を買って、近くの海に入る事にした。水は冷たく、濁っていたけど、背を浮かせて空を眺めて見ると、澄んだ音がして、気持ちが落ち着いた。これを越えれば明日が待っている。そんな気がしたので、近くの温泉まで歩いて、温泉に入り、家に帰り100枚の詩を書いて、それを糸のお母さんにみてもらおうと考えた。今は水曜日、3日寝ずに頑張ると決めた。そして日曜日、11時にハチ公にフラフラに辿り着いた。糸は5分遅れて来た。「久しぶり、元気だった?」「元気だったよ」「どこのお茶行く?、ん、体調大丈夫?帰ろうか?」「これさ、お母さんに渡して欲しいんだ」「全部、読めてるわよ、安心しなさい、1個記憶されて作品を言葉に変えてよ」 < 違う高いじゃない どうせダメなら いつか効く 輪の中であって 作り出す事の大切さ 馬鹿だった > 「なに、それ怖い、それが一番?とりあえずお茶行こう」カフェに入って珈琲を頼んだ二人とも、「で、何のよう?」「プレゼントを渡したいと思って」「ん?」「PCあげる」「最新のパソコンね、ありがとう、最近調子はどう?」「あんまり、うまいこと行ってなくて」「そう、あの飲み会楽しかったわ、柊さんとも今でもお付き合いしてるわよ、あんたに感謝してるって」「僕もお話しできてよかった」「今度、みんなで旅行でも行かない?」「行こう、連絡待っているよ」「この作品なんでこんなことしたの?」「ずっと書いていたんだ、詩、教えてもらったお礼に僕なりの表現で」「仕方がないわね、母に渡しておけばいいのね」「それと、わがまま言うと、会社を見て欲しいんだ」「なるほど、いいわよ、今から行こう」タクシーに乗って会社まで辿り着いた。そして、宇宙が見える望遠鏡を覗いた。同僚が今研究しているデータを見せた。「多分、宇宙の無はゴミの塊だ、全部、ブラックホールだ、なんてね」「だから、あんた達が研究してる事も現実なんだけど、現実じゃない研究も怠らない事よ」「俺は、宇宙は空気の逆、キウクでできてると思うぞ、これも研究してみるといいと思うぞ」「よし、来たしこれでいいのね」「はい、いいです、ありがとう、家まで送ろっか?」「

結構よ」「月さたまに笑うんだよ。きっとそこにいるから一人で笑っているのかもね。」「太陽と月、夜と朝、逆に共通点があるって事で、さようなら」「さようなら」明日から仕事に復帰する。同僚に聞いてみた。「調子はどう?」「おう、この頃調子上がってきたぞ」「サークルはどうする?」「俺は辞めておくよ」「そうか、またには飲みに行くか?」「そうだな、調子がいい時だから、今は辞めとく、頑張る時頑張らなくちゃ」「そうだな、俺も負けてらんないな、頑張らなくちゃ」「そう、上司が言ってたぞ、近々サークル禁止にするって」「マジかよ、講義しなくちゃ、情報ありがと、お礼は後で」「おう、お達者でな」「飛ばして行くぜ」そして上司に話した。サークル禁止勘弁して下さい。「なぜ、だね」「イベントは宇宙なんです」「違いますよ、宇宙はこっち、遊びもそろそろ辞めにして、あっちに行かないかい?」「僕がですか?」「うん」「行かせていただきます」「じゃ、後は頼んだよ、仕方がない、サークルも続ける許可を出す、わかっているね。サークル」「サークルもちろんやります」「ほんとかね、楽しむだけだよ、それを望んどる」「わかりました、これ以上迷惑はかけられません。みんなの為、続ける為、生きる為、精進します」「言ったからな、わしの証傷つけないでくれ」「はい」

## ありがとう

---

そして、上司に連絡をした。「なんとかします」と言った。その日の太陽はいつもより増して燃えていた。そして、その朝に彼女に連絡した。出るかなと心配だったけど、あっさりと電話に出た。「どこに行っていたのよ」「ちょっとそこまで」「明日、空いてるから会えない？」「じゃあ、青山のレストラン行こう、その後、車でドライブしたいんだけど、如何かな？」「青山？」「わかった、今から準備するわ」「じゃあ、明日の8時、表参道一丁目の改札で」「わかった」そして、綺麗な夜景で僕はプロポーズした。答えは「YES」と言われた。僕は「何があっても離さないから」と言った。若かりし頃の大切な指輪を君に渡して。